審 査 員 特 別 賞

「　大きなエバー・グリーンに乗って　」

経済学科　２年　豊岡瑞希（ペンネーム）

大学構内に立派にそびえ立つ一本の大きな緑の針葉樹。背の高さも、幹の太さも、枝の数も、葉の数も、類を見ないスケールだ。立ち寄って木陰で休まれば静かで心が落ち着く反面、威厳と風格への尊敬から芽生える物恐ろしさ、二つの相反する感情が両立し得る何ともセイクリッドな空間がここにはある。

時間に追われ、約束に追われ、日常をただ生きてるだけで疲労しきった身体と行く当てもなく彷徨い出した心は早急に居場所と対話の相手を求める。辿り着いたのは言うまでもなく、この“大きなエバー・グリーン”だった。

この針葉樹こそあらゆる混乱の中で燦然と立ち尽くしていたのだ。この樹を愛することは即ち、この樹を大事に次世代へと紡いできた多くの人々への感謝である。そして未来永劫、普遍的かつ永遠の緑を守り抜かねばならぬと使命感に焦燥を掻き立てられる。この時の洗練を受け切った樹は何よりも信用に値する。

声をかけてみたが明確な返答を得られない。樹を見つめる己の感情から湧き上がってくる自然な想いの芽吹きを大切に、それを答えにするしかない。巨大な樹木の枝に乗っかって世界を眺めまわしてみようと試みる。今まで見えなかった景色が澄み渡り、これまで如何に狭い空間で生きていたかを知る。でも綺麗な景色だけが見えるわけではない。知らなければそれはそれで良かったであろう、負の側面に目を当てざるを得ない。今日もまたどこかで狼煙が上がり、銃声や悲鳴が聞こえる。見えたものを見なかったことにはできない。一度乗っかった枝からは一生降りられない、死ぬまでこの樹と対話せねばならぬのだ。つまり私は針葉樹の磔にされてしまったのだ。そう感づいた瞬間、足を滑らせ落っこちてしまった。

夢だった。目が覚めるとＧＡＴＥＷＡＹの中。目の前に新聞が広がっていた。返却間近の「ハックルベリーフィンの冒険」が横にあった。チャイムが鳴った。また時間と約束に追われる生活が始まった。